

第 14 冊

『平城京 全史解説』 ～正史・続日本紀が語る意外な史実～ 大角修、学研新書、2009年 (上)

第13冊で『平安京はいらなかった』を取り上げました。その中で、平城京のことも少し触れたのですが、今回は平城京が都であった奈良時代のことについて、深めていきたいと思います。

この『平城京 全史解説』は正史である『続日本紀(しょくにほんぎ)』を扱っています。副題が「正史・続日本紀が語る意外な史実」とありますので、奈良時代の「表の史実」と「裏の史実」が出てきます。

教科書に載っている有名な人物や出来事が詳しくわかるだけでなく、その背景や人間関係などが理解できて、重層的に奈良時代のことがかかるような仕掛けになっています。

それでは、まず、著者の大角修(おおかどおさむ)氏の略歴をフリー百科事典『ウィキペディア(Wikipedia)』を参考に紹介しておきましょう。

お生まれは1949年、兵庫県姫路市。1973年に東北大学文学部宗教学科を卒業され、佼成出版社勤務をへて、仏教書・歴史書等の編集・執筆を行っておられます。有限会社「地人館」の代表もつとめられています。

次に、主な著書を紹介しておきます。

『ブッダ 真理に生きた聖者』(PHP研究所 1999)

『すぐわかるお経の心 なぜ「お経」を読むのか—その意味と教え』(東京美術 2001)

『名僧の漢詩を読む』(佼成出版社 2004)

『すぐわかる日本の仏教 歴史・人物・仏教体験』(東京美術 2005)

『探検・発見わたしたちの日本 都道府県からみる日本』全2巻 (谷川彰英監修 小峰書店 2005)

『日本人の死者の書 往生要集の〈あの世〉と〈この世〉』(日本放送出版協会 生活人新書 2007)

『日本ひらがな仏教史 仏と人の心がわかる』(角川書店 2009)

『平城京 全史解説 正史・続日本紀が語る意外な史実』（学研新書 2009）
『ひとりで生きる道 「大愚」良寛の生涯に学ぶ』（PHP研究所 2010）
『「宮沢賢治」の誕生 そのとき銀河鉄道の汽笛が鳴った』（中央公論新社 2010）
『イーハトーブ悪人列伝 宮沢賢治童話のおかしなやつら』（勉誠出版 2011）
『法華経の事典 信仰・歴史・文学』（春秋社 2011）
『ブツダと神々の物語 釈迦の生涯と経典の言葉』（勉誠出版 2012）
『浄土三部経と地獄・極楽の事典 信仰・歴史・文学』（春秋社 2013）
『天皇家のお葬式』（講談社現代新書 2017）

その外、『日本仏教史入門-基礎史料で読む』（山折哲雄共編著 角川選書 2009）や『かんさつ名人はじめての栽培』全8巻（東京学芸大学附属小金井小学校生活科部 指導／大角修 文／菊池東太、高橋尚紀 写真 小峰書店 2012）など共編・監修された本がたくさんあります。



正史「続日本紀」

さて、副題の「正史・続日本紀が語る意外な史実」についてですが、『続日本紀』とは何でしょうか？

その前に、『続日本紀』の前に編集された勅撰の国史といえば、何でしょうか？一般に「日本最初の正史」とか「六国史（りっこくし）のトップバッター」などと言われますね。

はい、正解は『日本書紀』ですね。『日本書紀』に次いで編纂された勅撰国史＝正史が『続日本紀』です。『日本書紀』のあとを受けて、文武天皇即位の年（697）から桓武天皇の延暦10年（791）12月まで、9代95年間の国の歴史が漢文で記されています。

ところで「六国史」とは何でしょうか、成立した順番に教えてください。

『日本書紀』『続日本紀』

に続いて、

『日本後紀』 『続日本後紀』 『日本文徳天皇実録』 『日本三代実録』

の6つの正史が編纂されました。

奈良時代のことは「続日本紀」

さて、『続日本紀』ですが、桓武天皇の延暦13年（794）から16年（797）にかけて、3回に分け、全40巻が完成しました。撰者は藤原継縄（ふじわらのつぐただ）・菅野真道（すがののみち）などです。編年体の簡潔な記述のほか、惠美押勝（えみのおしかつ）や道鏡、鑑真などの伝記も記載されているそうです。

あれ、菅野真道の名前がありますね。この人物は前回取り上げた『平安京はいらなかった』でも登場してきました。何をした人でしたか？

そう、桓武天皇の前で、式家の藤原緒嗣（おつぐ）と「徳政相論」をした人物でしたね。

とにかく、奈良時代の基本史料といえば、この『続日本紀』を外すことはできません。

山川出版社の教科書にも「国分寺建立の詔」「大仏造立の詔」「三世一身法」「墾田永年私財法」「浮浪・逃亡の続出」などの史料が登場しますが、これらの史料の出典はすべて『続日本紀』です。



国立公文書館のHPより

したがって、『続日本紀』は平城京があった時代の「全期間の記録」といえる歴史書なんですね。

『平城京 全史解説』の著者大角修氏はそのあたりのことを、次のように説明されています。

『続日本紀』は書名が示すとおり、『日本書紀』につづく2番目の正史だ。どちらも年ごとに記事をまとめた編年体で書かれている。

『日本書紀』は全30巻。その巻第1と第2は太初の神代記だ。『古事記』と同じく天と地が開かれた由来を物語って世のはじめを告げ、巻第3の神武天皇紀からが編年体の史書になる。高千穂の天孫降臨から179万2470余年の後、神武天皇は東征して大和を平定し、天の下を治めた。この国始まりは西暦では紀元前660年2月11日だという。・・・藤原京の持統天皇11年（697年）8月1日の条をもって、『日本書紀』は終わる。

その日、天皇は皇太子に譲位。同年同月、文武天皇即位。『続日本紀』はこの文武天皇から始まる。

つまり、連続した史書なのだが、『日本書紀』では深く神話に彩られているのに対し、『続日本紀』は当時の公文書を元に書かれたので、史実としての信頼性は高い。書かれていることと編纂された年代の隔たりも小さい。

『続日本紀』は文武天皇元年（697）から延暦10年（791）までの95年間にわたる記録で全40巻だ。そのうち、天平宝字元年（757）までの前半20巻は当初30巻にまとめられ、光仁天皇に奏

上された。後半20巻は桓武天皇の命により編纂が始まり、延暦16年に前半と合わせて全40巻が完成した。それはまだ桓武天皇の時のことで、記事はその在位の途中で終わる。

つまり『続日本紀』はほぼ同時代の記録だ。その95年間には平城京遷都から長岡京遷都までの奈良時代の全期間がすっぽり収まる。『続日本紀』が奈良時代の最も基本的な史料とされる所以だ。

『続日本紀』は、しかし、記述のほとんどが日々の出来事を箇条書きにただけのもので、素っ気ないほどに簡略だ。たとえば和銅3年の平城京遷都は同年3月10日の条に「始遷都干平常」とあるだけだ。

重要な史実なのに『続日本紀』には書かれていないこともある。たとえば鑑真が唐から戒律を伝えて東大寺に戒壇を作ったという記事はない。・・・遣唐使についても同様。当時の朝廷にとって遣唐使は触れたくないことだったのである。

一方、詳しく書かれていることもある。聖武天皇の大仏造立や称徳女帝と道鏡の事件については、かなり詳しく記されている。

では、『平城京 全史解説』の中から、私が勉強になったことや読者のみなさんに知ってもらいたいことを中心に、まとめていきましょう。

藤原京は捨てられた？

最初に取り上げたいのが、なぜ平城京に遷都したのか、ということです。なぜならば、694年に藤原京がおかれてわずか16年で廃都になってしまったからです。それまでの「〇〇宮」と違って「〇〇京」というのは規模が全然異なります。「〇〇宮」が「村」くらいの規模だったとすると、「〇〇京」は「都市」そのものを動かす、ということになります。

当然ですが、手間暇がかかります。経済的な負担も大きいですね。藤原京という大都市（未だ完成してはいませんでした）をゴミのように捨てて、現在の奈良に遷都したということは、大きな理由があるはず。その理由は何なのでしょう？

その前に、確認のための質問です。藤原京の前の都はどこですか？

答えは、飛鳥浄御原（きよみはら）宮でしたね。

では、藤原京ができた時の天皇の名前を教えてください。

答えは、持統天皇ですね。

次に、持統天皇の父親、旦那さん、そして子どもは誰でしょうか？

父親は、天智天皇です。旦那さんは天武天皇（天智天皇の弟）。そして、子どもは草壁（くさかべ）皇子です。

藤原京から平城京への遷都を主導したのは誰でしょうか?天皇でしょうか?

違いますよね。遷都を主導するのは、天皇ではない、ですよね。

では、誰でしょうか?

自分の娘を天皇の妃として外戚関係をつくり、政治の実権を握ろうとした**藤原不比等（ふひと）**でしょう。

不比等の娘**宮子**が嫁いだのが**文武天皇**です。文武は持統天皇の息子**草壁皇子**の息子であり、文武と宮子との間に生まれたのが**首皇子（おびとのみこ）**でした。そして、**首皇子（のちの聖武天皇）**を天皇にするという野望を持っていたのが藤原不比等でした。

藤原不比等は持統天皇や元明天皇という女帝の時代に、律令官制を整備し、かつ外戚政治を完成させていきます。まさに「女帝を手玉に取った」「マダムキラー？」として実権を掌握しました。平安時代には摂関政治という時期が登場しますが、それに先立つ奈良時代に平城京が完成していきます。

そして、**平城京は「藤原氏にとっての大舞台」**として、不比等の孫首皇子が天皇としてデビューを飾るべき場として、不比等は奈良盆地の北の端に新しい都・平城京を作ることを決意したのでした。



藤原京跡

しかしながら、藤原京三代目となる**元明天皇**は、平城京への遷都に反対だったといわれています。なぜなら、その理由はいうまでもなく、藤原京は、天武天皇、持統天皇が、恒久的な都とすべく計画したものであり、天武・持統天皇がうちだしたビッグ・プロジェクトの都、つまり名前は「**藤原京**」ですが、「藤原氏のための藤原京」ではなく、「**天皇の都**」だったからです。

それに対して、平城京は藤原氏という官僚が、自分たち一族の力を誇示する都でした。いわば「**藤原氏の都**」です。

ですから、元明天皇は気がのらないまま、和銅3年（710）に、遷都に従わざるをえなかったのです。

こうして、わずか16年で藤原氏によって藤原京は捨てられ、「藤原氏の都」＝「平城京」が造営されていくことになりました。

ここで、あなたに質問があります。

奈良時代最初の天皇である元明天皇ですが、奈良時代になる直前の708年に武蔵の国から銅が献上されたのを契機に鑄造された銭がありますが、これは何という銭でしょうか？また、元号が変えられましたが、何に変えられたのでしょうか？

答えは、**和同開珎**ですね。唐の開元通宝をモデルに鑄造したお金で、いわゆる**皇朝十二銭の最初の銭**と呼ばれています。そして、もう一つの答えが「**和銅**」でしたね。和同開珎は「**富本銭**」が発見されるまでは、日本で最初の銭とされてきました。

なお、藤原京を捨てて平城京に移った他の理由として、下記のような考え方もあります。

1つめは、「藤原京の水はけが悪かったから」という説があります。しかし、藤原京の跡地は現在でも水はけがよくありません。また、『**万葉集**』に次の歌があります。

大君は神にしませば 赤駒の 匍匐（はらば）ふ田井（たい）を 都となしつ

大君は神にしませば 水鳥の 多集（すだ）く水沼（みぬま）を 都となしつ

大君は天武天皇のことですね。「赤駒の匍匐ふ田井」や「水鳥の多集く水沼」を都にしたことを讃えていることがわかります。逆にみれば、それだけ条件の悪い土地だったことになりますよね。（ちなみに、この2つの歌は、洛北高校生で日本史選択者ならが持っている『詳録新日本史史料集成』に掲載されています。）

ということは、建設前から水はけが悪いことはわかっていたということになります。ですから、平城京への遷都の理由とは考えにくいですね。

2つめに考えられることは、「遣唐使がもたらした長安の最新情報と藤原京の姿が合致していなかったから」という説です。

遣唐使は、669年（天智8年）に派遣してから途絶えていました。672年には**壬申の乱**が起り、694年に藤原京に遷都されました。その後、697年には持統天皇から文武天皇への皇位継承が行われ、

701年には「**大宝律令**」が制定されていきました。そんななか、704年に遣唐使が帰国しました。

栗田真人（あわたのみひと）が持ち帰った最新の中国都城の情報と藤原京の実態があまりにもかけ離れていた、ということです。

つまり、唐の都長安では、宮が京の北端に位置していました。「**天子南面**」の思想です。しかしながら、藤原京は、宮が京の真ん中にありました。この辺りは、前回の『**平安京はいらなかった**』でもやりましたね。

藤原京は当時の「グローバル・スタンダードに合致していなかった」「だから捨てられた」というのです。

さて、遷都の理由は上記のようにいろいろなことが考えられ、答えを明確にできない部分があります。

でも、はっきりしていることがあります。それは、平城京に遷都されたことにより、藤原京の住民である貴族や役人は、当然のことながら新しい都に移っていったということです。

その時に、藤原京で使用した建築部材など、再利用できる物資はほとんど全て平城京に運ばれていきました。藤原宮も例外でなく、瓦や柱などの建築部材を平城宮で使用するために宮内の建物は解体されたといえます。

こうして恒久的な都として造られた初めての都である藤原京はその役割を終え、捨てられていきました。その後、藤原京のあった地域は水田地帯となり、かつて都があった場所は田園風景に変わっていきました。残念ながら、藤原京はその痕跡を消していくことになったのです。

奈良時代って？

奈良時代は70年ほどしかありません。後に続く平安時代は400年ほどですから、平安時代の5分の1くらいの長さしかありません。とても短いですね。なので、奈良時代は理解しやすいし、覚えやすい時代ですよ。

奈良時代の権力者といえば、7組います。覚えていますか？

「**ひどい 長屋に 四人の子ども、も なか どう 百円で**」

という語呂合わせを覚えていますか。この語呂合わせは、確か、[菅野祐孝先生](#)の参考書の中に載せられていたものだと記憶していますが、違うかもしれません。

一方、この時代の天皇は、

「げん げん しょう こう じゅん しょう こう」

という語呂合わせでしたね。これは、私のオリジナルです。

具体的には誰でしょうか？名前がでてきますか？

「ひどい 長屋に 四人の子ども、も なか どう 百円で」のほうから。

藤原不比等 → 長屋王 → 藤原四兄弟 → 橘諸兄 → 藤原仲麻呂 → 道鏡 → 藤原百川

でしたね。

「げん げん しょう こう じゅん しょう こう」はどうでしょうか？

元明 → 元正 → 聖武 → 孝謙 → 淳仁 → 称徳 → 光仁

の7人です。アンダーラインの女帝が4代3人いますね。孝謙が称制して称徳になりましたよ。光仁の息子桓武天皇は平安時代の天皇として考えた方が良いでしょうか。

ところで、[2006年度の大阪大学の問題](#)に次のような問題があります。

奈良時代は中央政界において激しい権力闘争が行われた時代でもある。749年（天平勝宝元年）に聖武天皇が譲位してから奈良時代末までの、権力者の変遷と政策基調の変化について述べなさい。（200字程度）

上述した7組の権力者の内、聖武天皇のあとの権力者の変遷ですから、藤原仲麻呂（中国風の政治）→道鏡（仏教政治）→藤原百川（律令政治の再建）を軸に、まとめればいいですね。

野沢先生の解答例です。

光明皇太后の信任を得た藤原仲麻呂は、養老律令を施行する一方で橘奈良麻呂の変で反対派を倒し、官職名を中国風に改めるなど専制的な政治を行った。しかし光明皇太后の死後、孝謙上皇の信任を得た道鏡が台頭すると、対立して敗死した。孝謙上皇が重祚して称徳天皇となると、道鏡は権勢を握って仏教政治を推進し、皇位継承を図ったが失敗した。称徳天皇の死後、藤原百川らは道鏡を追放して光仁天皇を擁立し、律令政治の再建に努めた。

なお、詳しい解説が nozawanote.g1.xrea.com/02entrance_examination/hanndai/06handai_exam1.htm に掲載されていますので、直接野沢先生のホームページを見てくださいね。

長屋王の変

さきほど、「ひどい 長屋に 四人の子ども も なか どう 百円で」をやりましたね。つまり、奈良時代の権力者は

藤原不比等 → 長屋王 → 藤原四兄弟 → 橘諸兄 → 藤原仲麻呂 → 道鏡 → 藤原百川

と動いていきました。

最初の藤原不比等について、私は「マダムキラー？」だと書きました。

その藤原不比等が、養老四年（720）8月3日に62歳で亡くなりました。10月23日、不比等に太政大臣正一位が追贈されました。『続日本紀』で記載された最初の太政大臣です。その追贈の詔を不比等の館に伝えた勅使が、大納言正三位の長屋王と中納言正四位下の大伴旅人でした。

藤原不比等が亡くなりましたので、その後の権力は長屋王が掌握することになりました。長屋王は天武天皇の孫、武市皇子の子ですね。そして、長屋王の妻は文武天皇の妹吉備内親王でした。長屋王は養老5年（721）に右大臣に就任、神亀元年（724）に左大臣に就任していきました。

ここで質問です。長屋王の時代には、大きな改革が行われています。養老6年（722）に計画された土地改革は何でしょうか？また、翌年（723）に施行された法令は何でしょうか？土地の私有を一部認めたものですよ。

722年の計画は「百万町歩開墾計画」でした。

723年の法令は「三世一身法」でした。超有名な史料ですよ。

「三世一身法」はよく出てきますので、ここでは「百万町歩開墾計画」について補足しておきましょう。

養老6年閏4月25日に、長屋王を実質的な長とする太政官が「良田一百万町を開墾」することを奏上しました。壮大な計画です。百万町歩を新たに作るというのですが、平安初期の全国の田は、いくらあったと思いますか？近似値を教えてください。三択でいきましょうか？

①80万町歩

②120万町歩

③160万町歩

答えは、①で、約86万町歩。なんか、当時86万町歩しかないのに、新たに100万町歩を開墾させる、というのは、無謀な計画だと思いませんか？

平城京には、長屋王の大規模な邸宅跡が見つっていますが、その大きさからも長屋王の権力の大きさがわかります。(あとで平城京図を掲載しています)

しかし、その長屋王が藤原四兄弟によって追い詰められます。そのことを、『平城京 全史解読』のなかで、**大角修氏**は次のように述べています。

神亀5年(726年)9月13日、聖武天皇と光明子との間に生まれた皇太子がわずか生後1年で没した。死因は不明。長屋王が呪殺したという噂が立ったようだが、・・・それが長屋王の変に繋がる。

神亀6年2月10日、左京の漆部造君足(ぬりべのみやつこきみたり)と中臣宮処連東人(なかとみのみやこのむらじあずまびと)という者が「長屋王はひそかに左道(妖術)を学びて国家を傾けんと欲す」と密告した。

その夜、伊勢鈴鹿、美濃不破、越前愛発(あらし)の三関に使いを送って都から地方に逃れる道をふさぎ、持節大將軍である式部卿藤原宇合(しきぶきょうふじわらのうまかい)らが宮城の警護の六衛府の兵を率いて長屋王家を囲んだ。

あくる11日巳の時(午前10時頃)、一品(いっぽん)の宮の舎人(とねり)親王、新田部(にいたべ)親王以下、大納言多治比真人池守(たじひまひといけもり)や中納言藤原武智麻呂(むちまろ)らが長屋王宅に行き、その罪を糾問した。

・・・12日『続日本紀』は「王を自刃せしむ」つまり自殺させたと記している。46歳のころである。妃の吉備内親王も子の膳夫(かしわで)王らも首をくくって自殺した。また、廷内人は皆とらわれ、衛土府に監禁された。

13日に長屋王と吉備内親王の遺体を生駒山に葬る。

17日、上毛野宿奈麻呂(かみつけぬのすくなまろ)ら7人を共謀の罪で流罪に処し、90人を放免。

18日、長屋王の兄弟、生き残った子らの罪を不問とし、すべて赦免。この日、百官の大祓えを行った。

この大祓えは長屋王家の死穢を祓い清めるものだろう。そして長屋王の変によって皇親勢力は後退し、藤原氏が復権する。

最後にアンダーラインで指摘されているように、**長屋王の変の歴史的意義は、天武天皇以来続いてきた皇親政治が終わりを告げた**、ということでした。

そして、長屋王の変の結果、**藤原不比等の娘光明子が聖武天皇の皇后につく**ことになりました。光明子の母は**県犬養橘三千代**(あがたのいぬかいのたちばなのみちよ)で、**橘諸兄**の母でもあります。

それまでの皇后は、推古天皇のように欽明「天皇の娘」であったり、皇極天皇のように「皇族の娘」であったりして、天皇家以外の女性が皇后になることはありませんでした。ところが、藤原氏は光明子

を皇后にしようと目論んだわけですね。そして、その前に立ち上がったのが**皇親勢力**の代表格である長屋王でした。

したがって、藤原氏から見れば、長屋王は「邪魔な存在」「消すべき存在」になったのでした。古代の蘇我氏を取り上げた時に、藤原氏は「邪魔者を消す」ことで成り上がっていった、権力を手中におさめていったことなどを強調しました。今回も、同じ構図が見られます。長屋王は謀られたのですね。

ところで、『平城京 全史解説』には、面白い後日談なども掲載されています。ちょっと、紹介してみましょう。

天平10年7月10日、平城宮の役所で殺人事件が起きた。大伴子虫（こむし）が中臣宮処東人（みやこあすまひと）を刀で斬り殺したのだ。子虫は兵器を管理する左兵衛寮の少属（しょうさかん）という下級官吏、東人は右兵衛寮の頭（かみ）である。二人は仕事の暇に囲碁をしていた。話が長屋王のことになったとき、子虫がいきなり立腹して刀を抜いてしまったのだ。

このきっかけになった長屋王・・・は妖術を学んで国家を転覆しようと企てているとと偽りの密告をされ、妻子とともに毒殺された。

実はその密告者が東人だった。その功によって無位の身から右兵衛寮の頭に栄達したのである。一方、子虫は長屋王に仕え、たいへん厚遇をうけていたのだが、今や不遇の身に転落している。・・・いわば、プッツン事件なのだが・・・。

これって、今で言えば霞ヶ関の官庁の一室での殺人事件といってもいいですよ。長屋王の時代にいい目をしていた者が、不遇の身に落ちてしまった。そして、そんな状況を造り出した張本人が目の前にいて、しかも出世している。怒りというか憤りというかに身を任せて、斬り殺したのです。そんな事件が『続日本紀』には書いてあるのです。

さらに、こんな記述もあります。

長屋王の変の後には、こんなこともあった。舎人（とねり）親王が朝廷に来ても、役人たちは席を立てて礼をしなくてもいいということが正式決定されたのである。現在の閣議決定のような太政官の決定だ。

舎人親王は一品（いっぽん）の宮にして知太政官事（ちだいじょうかんじ）という皇族の最長者である。その親王をシカトせよというのだから、「そこまでやるか」のいじめだ。長屋王の変の後には、後退を余儀なくされた皇親勢力が忍従の日々を過ごしたであろう事がしのばれる。そうしたことが聖武天皇の遷都にも橘奈良麻呂の変にもつながってくる。

舎人（とねり）親王とえば、父は天武天皇ですよ。息子に淳仁天皇がいます。『日本書紀』の中心的な編者の一人でした。その舎人親王が藤原氏などから「シカト」されているっていうんです。皇親勢力の勢いが、どんどん削がれてしまっているという証拠ですね。



※平城京図の中に長屋王邸や藤原仲麻呂邸があります。位置を確認し、大きさを想像してくださいね。

長屋王の祟り!?

長屋王の変（729）の後、藤原氏は四家と光明皇后を軸に権勢を順調に拡大させていきましたが、世に言う「長屋王の祟り」とされる出来事が起きます。藤原四家の兄弟がことごとく、疱瘡で死んでしまったのですね。ちなみに、疱瘡とは天然痘のことで、種痘によって根絶されるまでは死亡率の高い疫病でした。

ところで、藤原四兄弟とは誰でしょうか？また、彼らを始祖とする藤原四家とは何でしょうか？

四兄弟は 無智麻呂（むちまろ）、房前（ふささき）、宇合（うまかい）、麻呂（まろ）

でしたね。

そして、藤原四家とは順番に 南家、北家、式家、京家

でしたよ。

さて、天然痘が天平7年（735）、まず九州で猛威を振るいました。翌年にはいったんおさまったようですが、天平9年、再び起こり、猛威はすさまじかったと言います。4月19日、大宰府管内の諸国に天然痘が流行して多くが亡くなります。やはり西日本から流行しはじめましたが、なんとその2日前の4月17日に藤原房前が亡くなります。死因は天然痘でした。

以後、天然痘は全国的に流行し、四月以来、疫病と干害が重なって田の苗が枯れてしまい、ついには皇族や高位の貴族もバタバタと倒れていきました。

藤原四家でも、北家の房前に続いて7月13日には京家の麻呂、7月23日に南家の無智麻呂、8月5日には式家の宇合が亡くなってしまいます。藤原不比等の4人の男子が全員死んでしまったのです。何とということでしょう！！

長屋王を死に至らしめた張本人たちが、次々と天然痘という伝染病で命を落としていったのです。これが「祟り」でなくて、何だというのでしょうか！？

実は、日本の歴史では政変で追い落とされた不遇の身の人たちは、亡くなった後に、自分を死に追いやった人々に「復讐」すべく、「祟って」いきます。有名なのは、藤原時平に大宰府に左遷させられた菅原道真の「祟り」。さらに平安時代の終わり頃、保元の乱で敗れた崇徳上皇の「祟り」が起きますね。そのため、道真の鎮魂のために北野天満宮が造営されますし、崇徳上皇の鎮魂のために白峯神宮などが造営されました。

『平城京 全史解説』のなかで、大角修氏は、このあとの政界の動きをまとめておられます。

9月28日、空白になった官位と官職の任用が行われた。無位の白壁王（しらかべおう、のち光仁天皇）、道祖王（ふなどおう）があらたに官位を得たほか、橘諸兄が大納言になって当面の政権をになう。藤原四家もそれぞれの子が引き継ぎ、南家の仲麻呂、式家の広嗣など、のちの戦乱の主役も官位を得た。『続日本紀』天平9年の末尾に「公卿以下天下の百姓相（あい）継ぎて没死（もっし）せるもの勝（あ）げて計（かぞ）うべからず。近代（ちかきころ）より以来（このかた）、未だ之（これ）有らざるなり」という災厄の年は、将来の政変・戦乱の種子をやどして暮れたのであった。

あくる天平10年1月13日、阿倍内親王が皇太子になる。基皇子の姉で、聖武天皇と光明皇后の皇女である。

その時には安積（あさか）親王が誕生していたのだが、この親王は皇犬養広刀自（あがたのいぬかいのひろとじ）という夫人が産んだ皇子で、光明子の子ではなかった。そして、安積親王は10数年後に疑惑の死をむかえ、阿倍内親王が孝謙天皇になるのである。

ところで、なぜ、長屋王一族は「狙われた」のでしょうか？

聖武天皇と光明子の間にできた基（もと）王が生後1年で亡くなったことは先ほど書きました。藤原不比等の孫であり、藤原四兄弟の甥にあたる基王が亡くなってしまったのです。これにより、藤原氏は大いにあわてたと思います。聖武天皇と光明子の子としては阿倍内親王がいますが。

しかし、藤原氏にとってやっかいだったのは、長屋王とその妻や子供らが皇位を継ぐ資格を持っていたということです。長屋王が、単に光明子の立后にとって邪魔な存在だったわけではなく、反藤原・非藤原の勢力の中核が長屋王であり、長屋王一族だったのです。

付言すると、長屋王の妻は吉備内親王です。父は草壁皇子、母は元明天皇です。そして、兄は文武天

皇、姉が元正天皇です。長屋王よりも、血統は良いといえますよね。

だからこそ、長屋王だけではなく、吉備内親王も子どもたちも皆殺し（実際は自害）にあったのです。どうです、権力を握るために、維持するために、藤原氏は邪魔者を消していくというスタイルをここでも貫徹していますね。



※上記の写真の説明です。近鉄の新大宮駅から平城宮跡まで歩いている途中に、「長屋王邸跡」の碑がありました。この碑は右の写真のように、「ミ・ナール」の建物の前に設置してあります。もともとこの場所にあったのが、「奈良そごう」でしたが、「イトーヨーカドー」になり、今は「ミ・ナール」に変わっています。

実は、この場所に奈良そごうが建設される前、奈良国立文化財研究所が発掘調査を行い、その結果1988年に約4万点もの木簡が出土しました。その記録から奈良時代の貴族の詳細な暮らしぶり分かる大発見でした。私はその時のニュースを今でも覚えています。

奈良そごうの建設は遅れ、89年初頭を予定していた開業が同年10月にずれ込み、さらには長屋王邸宅跡に建てられた奈良そごうが2000年に倒産した時、地元では密やかに「長屋王の祟り」ではないかと噂されました。えーっ、「長屋王の祟り?!」ですか。

さらに、奈良そごうの後をつぎ2003年から営業していたイトーヨーカドーも閉店することになりました。これに関して、「まとも、長屋王の祟り!」と噂されているそうです。2018年に後を継いだ「ミ・ナール」はどうなるのでしょうか？

次号に続く